

言語道断

田中 愛子

畏れ多くも御製を「言語道断」と評するとは……。いえない、ご安心ください。

後鳥羽院に呼び出され、院の百首歌の感想を求められた藤原定家は、ひら之を披きんぎょくくに金玉の声なり。今度凡むよそ言語道断なり。(略)毎首、不可思議なり。感涙禁じ難き者なり」と感じ入り、日記に記した。「これは手放しの誉めやうである。言語道断とは、言葉であらばせないほど奥深い、の意。」と高野公彦著『明月記を読む』にある。

今、言語道断というのと、とんでもないのかもつてのほかといった意味に使うことが多い。しかし、それは広辞苑では三番目の用法である。もとは仏教用語で、「言語で説明する道の絶えた意」であり、「仏教の奥深い真理はことばで説明することができないことをいう」のだそうだ。そこから、一般的に、口ではどうい言い表せないことをいうようになったのである。たしかに、文字どおりに読めば、言語で表現する方法がないということである。長い歴史の

中で、一つのことばが正反対の意味をもつようになっていったようである。

いつだったか、タレントのタモリさんが、座右の銘はなにかと問われて、「適当」と答えていたけれど、この「適当」も正反対の意味をもつことばだ。広辞苑では「ある状態や目的などに、ほどよくあてはまること」が第一義で、次に、「その場に合わせて要領よくやること。いい加減」とある。タモリさんのその時の表情を思いだすと、二番目の意味で使っていたようにも感じたけれど、案外に含蓄のあることばであるから、その場その場に即した対応をするということだったのかもしれない。

職場などで「適当にやっておいてください」といわれたからといって、いい加減にやってしまったてはいけない。状況に応じて、自分の判断でその場にふさわしい処理をしなければいけないのだ。

原子力規制委員会、実体は原発再稼働後押し団体

高野公彦『無縫の海』

「規制」とは、おきてやきまり。規律をたてて制限すること。規制委員会は当然、規律にしたがって何らかの制限を課するために目を光らせているはずの存在である。規制委員会が、「規制」という看板をかかげながら、その実、言葉とは正反対に原発の再稼働を後押ししているとしたら言語道断である。